

北海道偕行会全道大会

北海道偕行会の第77回全道大会を、ご来賓に北部方面総監・吉田圭秀陸将、講師に産経新聞論説副委員長・佐々木頼氏をお招きして、11月2日「ネストホテル札幌駅前」で開催した。前段行事の講演会には札幌・真駒内・北恵庭の各駐屯地から11戦車隊長ほか現職幹部30名の出席を得た。各修親会長のご理解・ご協力の賜物である。

佐々木氏は政治記者として豊富なご経験を有し、米国には6年在勤しておられた。「国際情勢とわが国の課題―日本の冊封化を防げ」と題する講演では次のように強調された。独裁的な体制、信義を重んじない体質の国が日本近隣には複数存在する、そういう国の「韜光養晦＝本音隠し」にだまされず、本音を読める的確に対応すべきだ、と。「冊封」とは朝貢国の王にシナの皇帝が爵位を授けることで、聖徳太子はそれを嫌い「日、出づる処の天子、書を日、没する処の天子に致す」で始まる国書を隋に送った史実が思いだされる。

後段行事は国歌斉唱、物故会員5名への黙祷の後、総監のご挨拶をいただいた。総監は偕行社とはこれまでの勤務を通じて縁が深いと回顧され、元本部事務局長の菊地勝夫氏や熊本偕行会の特に旧軍諸先輩との交流を例として挙げられた。

次いで当会から井上和男会員（自75）に「出版祝い」を贈呈した。井上会員は5年の歳月をかけて、『魂』忠魂碑・道内戦没者の慰霊」と題する道内全域の忠魂碑等写真集を完成し、昨日付けで自費出版した。北海道内市町村すべてに聞き取り調査し、52基の忠魂碑等に参拝・現地調査した成果である。これは国や道、大学の研究者等も成しえなかったことで、ただ敬服あるのみ。北海道の各部隊にも精神教育等の基礎資料として活用し



大先輩集合



総監を囲んで

てもらいたい本である。英霊の志とそれを顕彰しようとした郷土の先人の心を理解し、若い隊員に伝えてもらうためにもぜひ活用を、と願うものである。

前衆議院議員・高木宏寿会員（陸自83）は、「この種の調査は本来国の仕事だが、荒廃した忠魂碑等の管理に厚労省がようやく予算をつけた。一歩前進である」と。因みに高木会員は札幌月寒忠霊納骨塔奉賛会の顧問である。同会員の発声で乾杯、懇談に入った。

本席には旧軍の経歴ある先輩が4名、58加藤佳夫、59野俣明、60加藤正一、61松尾義孝の各位が出席されたが、それぞれ総監と歓談、総監も深い敬意をもって傾聴しておられた、と拝見した。初対面、旧知を問わず談笑のうちに早くも定刻を迎え、恒例の「軍歌演習」は4名の先輩と総監を中心にスクラムを組み、陸軍士官学校校歌「太平洋の波の上……」、北部方面隊歌「おお拓け行く北海の……」を大合唱。メの万歳は上富良野から参加の陸自93瀬田克巳会員が音頭をとったが、原隊の2戦車連隊が、つい先日終了した方面隊戦車射撃競技会で部隊対抗優勝、90戦車の部で中隊対抗・小隊対抗とも優勝したと報告し、賞賛の声のうちに意気軒高な万歳三唱となり、来年の再会を約して大会の幕を閉じた。